

【コラム】

「成長資本主義と脱炭素社会の相克

－ 『成長の限界』の今日的意義－

経済研究所 所長代理 北嶋 守

1. 気候変動と脱炭素社会への転換

IPCC (国連気候変動に関する政府間パネル: Intergovernmental Panel on Climate Change) 第5次評価報告によれば、1880年～2012年で世界平均気温は0.85℃上昇しており、特に1980年以降の各10年間はいずれも、1850年以降のどの10年間よりも高温となっている(図1参照)。こうした「気候変動」への対策に関する議論は2015年に採択されたSDGs (持続可能な開発目標) で掲げられている「目標13: 気候変動に具体的な対策を」に最も関係する議論であり、喫緊の課題となっている。

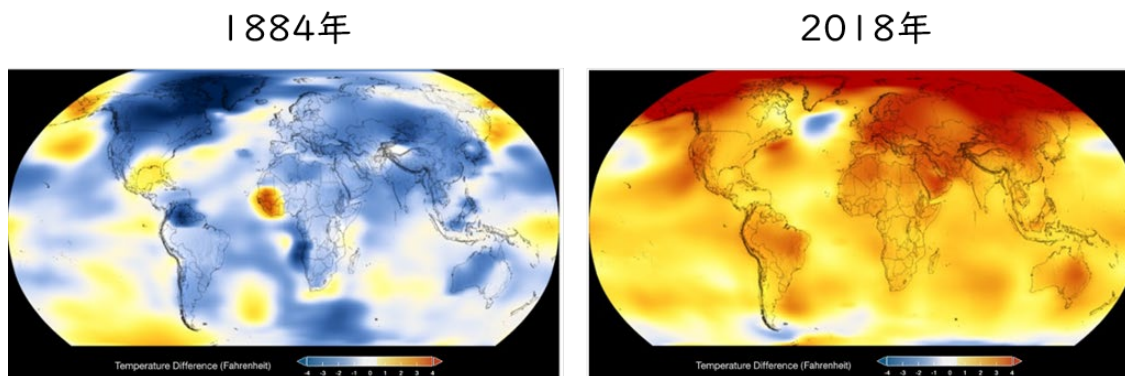


図1 世界地表面温度変化

補足: 1884年と2018年の世界の地表面温度の変化を色で示しており、青色は1884年から2018年までの世界の平均気温よりも低く、オレンジは高いことを表している。図が示すとおり、世界の地表面温度の上昇は明らかで、20世紀半ば以降の温暖化は人間活動の影響によるものである可能性が極めて高い。このまま対策しなければ80年後には世界の平均気温は最大4.8℃上昇すると予測されている。

出所: 日本気象協会 SDGs レポート(2019.10.03)

<https://www.jwa.or.jp/news/2019/10/8374/>

出典: NASA Scientific Visualization Studio

こうした状況を踏まえて、2020年10月26日、第203回臨時国会の所信表明演説において菅義偉内閣総理大臣は「2050年までに、温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする¹、すなわち2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」ことを宣言、これを受け政府は2020年10月から国の中長期的なエネルギー政策の方針「エネルギー基本計画」の見直しを開始した。今年度に入ると政府は、2021年4月に中長期のエネルギー政策の指針となる次期基本計画案を6月に決定する方針を固め、そこでは、菅義偉首相が表明した、2030年度の温室効果ガスを2001年度比で46%削減する新目標の実現に向け、電源構成に占める再生可能エネルギーの比率をどこまで引き上げられるかが焦点となっている。このように国際社会が気候変動対策の一環として「脱炭素社会」に急速に舵を切ったことによって、日本でも洋上風力発電をはじめとする再生可能エネルギーへの期待がにわかに高まってきた。

2. 『成長の限界』の今日的意義

だが、国際社会の情勢に合わせた日本の脱炭素社会へのシフトについて、1974年当時、少なくとも中高生以上だった人々には「どこかで聞いた話」と感じたのではないだろうか。私は中学3年生か高校1年生だったと思うが、日本では「サンシャイン計画」が動き始めていた。これは1973年の第1次石油危機後、エネルギー危機への対処、無公害社会の建設を目指して、当時の通産省が打ち出した太陽（特に太陽熱利用）、地熱、石炭、水素等の新エネルギー技術開発計画であった。さらに1978年には、「サンシャイン計画」に関連して、省エネルギー技術の開発を目的とする「ムーンライト計画」も発足している。これらの計画はその後どうなったのだろうか²。それはさておき、今から半世紀近く昔に日本はかなり画期的な計画を打ち出していたことは確かである。その背景には何があったのか、それは国内の公害問題の深刻化や二度にわたる石油危機という非常に身近な危機感に惹起されたものであったと思われるが、加えて、当時、世界を脅かせたローマクラブのレポート『成長の限界』の影響も大きかったと考えられる。私が『成長の限界』の本に出会うのは社会人になり、民間の研究所でシステムダイナミックスという手法を知った頃なので、だいぶ後になってからだが、1970年代初頭から1980年代の時期は、シンクタンクで未来予測がブームになっていた。1970年代半ばには、社会学者ダニエル・ベルの『脱工業社会の到来－社会予測の1つの試み－』の日本語版も刊行されている。

周知のように、『成長の限界』はローマクラブがマサチューセッツ工科大学のデニス・メ

¹ 「排出を全体としてゼロ」とは、二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの排出量から、森林などによる吸収量を差し引いてゼロを達成することを意味する。

² 「サンシャイン計画」等の成敗については様々な意見があると思うが、この計画が日本の再生可能エネルギーの黎明期を意味していたことは確かなようである。その概要については、経済産業省資源エネルギー庁「再生可能エネルギーの歴史と未来」（2018年2月1日掲載）
<https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/tokushu/saiene/saienerekishi.html>（2021年6月7日閲覧）を参照。

ドウズ博士を主査とする国際チームに委託して、システムダイナミクス的手法を使用してとりまとめられた研究で、1972年に発表され、「人口増加や環境汚染などの現在の傾向が続けば、100年以内に地球上の成長は限界に達する」と警鐘を鳴らした。このレポートは13か国語に翻訳され世界的ベストセラーとなった。だが、このレポートの真価は単なる世界モデルによる予測結果の表示に留まらず「持続可能な社会」への処方箋を提示している点にある。メドウズ博士はその後『成長の限界』の検証に取り組み、1992年には第2作『限界を超えて生きるための選択』、さらに2004年には第3作『成長の限界 人類の選択』を著している。当然、1988年のIPCCの設立には、1972年に発表された『成長の限界』に触発された各国のシンクタンクによる未来予測が大きく影響したものと推察される。

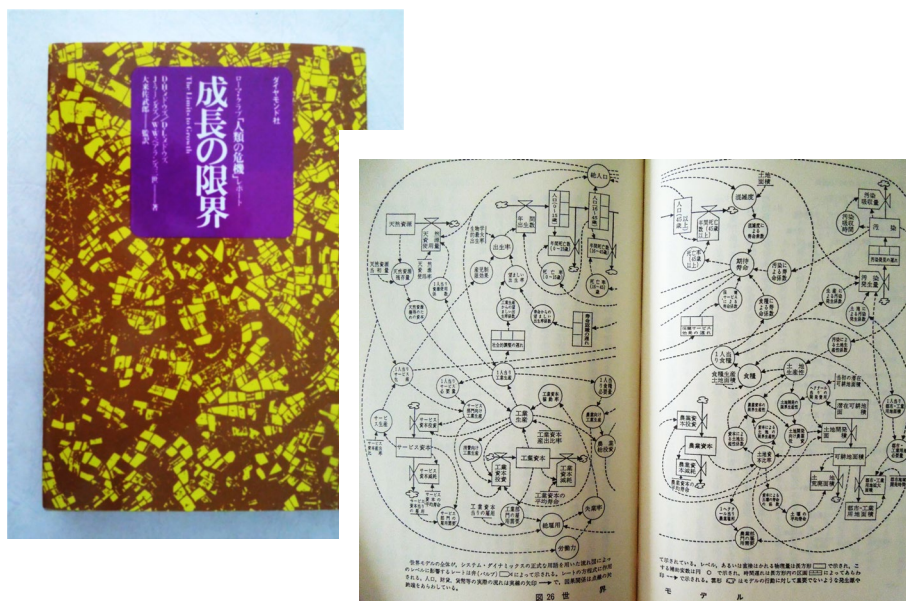


写真1：30数年ぶりに本棚から取り出した『成長の限界』(左)
と「世界モデル」のページ(右)

出所：D・H=メドウズ他（大来三武郎監訳）（1972）pp.86-87。

3. 気候変動と人類の関わり

産業革命以降、気候変動の指標の1つである世界平均気温の上昇は、太陽放射の変動の影響を上回るものであることは科学的に証明されていると言って良いだろう。一方、地球温暖化をめぐる議論とは直接関わりはないが、人類学者で考古学者でもあるブライアン・フェイガン博士が著した、氷河時代末期から近代に至るまでの人類の歴史が如何に気候変動の影響を受けてきたかに関する研究は、非常に示唆に富むものである（図2参照）。

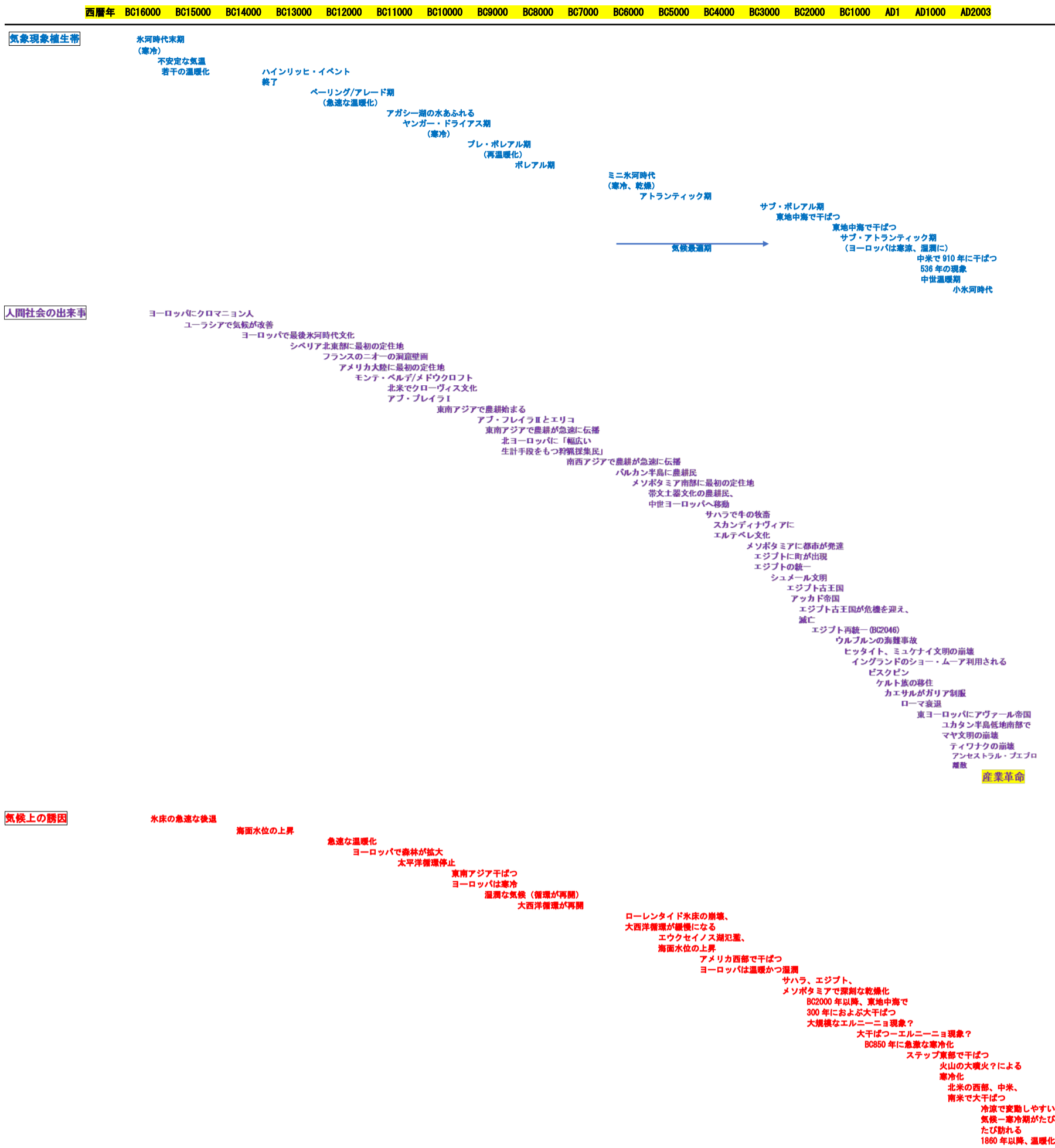


図 2：気候上および歴史上のおもな出来事

出所：ブライアン=フェイガン（東郷えりか訳）（2008）、p.40,164,262 の各表を基に作成。

図2の元となっている彼の『古代文明と気候大変動』の副題は、「人類の運命を変えた二万年史」となっている。彼のこの研究は、古代文明が如何にして生まれ、そして、滅びたかに関する気候学の成果に基づくものであり、それは『成長の限界』とは異なる視座や角度から、私たちに気候、文明、人類、社会、産業などの関係を考える機会を提供しており、地球規模の気候変動に対する人類の脆弱性を指摘している。日本語訳された彼の著書としては、ほかにも、『歴史を変えた気候大変動』（河出書房新社、2001年）や『千年前の人類を襲った大温暖化』（河出書房新社、2008年）などがある。

4. 成長資本主義と脱炭素社会の相克

近年、温暖化による地球環境の悪化に加え、世界中で広がる格差や貧困の問題といったこれまでの成長資本主義によってもたらされた負の側面（負の遺産）について、特に若い世代は気づき始めている。経済学では「脱成長という成長」への模索も始まっている。環境経済学や生態経済学のみならず、ソーシャル・キャピタル論³などが盛んになってきているのもその証左であろう。こうしたパラダイム転換の兆しの中で「アベノミクス 成長戦略」の後継者である菅政権は成長資本主義と脱炭素社会の相克をどのようにして埋めるつもりなのだろうか⁴。

さて、私が好きな映画に山田洋次監督・渥美清主演映画『男はつらいよ』がある。48作品の全てを何回も鑑賞しているが、毎回、山田監督は寅さんのセリフを通して、彼自身の哲学を暗喩的に表現している。その中で印象に残っているものの1つに、寅さんが新幹線に乗るシーンがある。彼はたまたま乗った新幹線の車内で車掌に「何で乗っている時間が短いのに運賃がこんなに高いんだ」と問いただすのである。これを観て観客の多くは笑う。だが、その意味することの深さに気づく人は少ない。

フェイガンの言葉を本稿の結びに代えよう。「われわれが人間社会のなかのスーパータンカーになったのだとすれば、これは妙に不注意な船だ。乗組員のうち、機関室に目を配っている者は一握りしかいない。（中略）操船指令室にいる人は誰一人、海図も天気図ももっておらず、それが必要だということにすら賛成しない。それどころか、彼らのなかで最も権力のある者は、嵐など存在しないという説に与している。（中略）乗客10人につき1人分しか救命ボートがないことを案じたりする人はわずかしかない。そして、舵手の耳に、方向転換を考えたほうがいとあえて耳打ちする人は誰もいない」⁵。

参考文献

稲葉陽二（2011）：『ソーシャル・キャピタル入門』中央公論新社。

³ 入門書としては、稲葉（2011）を参照。

⁴ 成長論の是非、資本主義後の世界については、水野（2014）や山内（2020）などが参考になる。

⁵ フェイガン（2008）pp.386-387.

ダニエル=ベル (内田忠夫ほか訳) (1975) : 『脱工業社会の到来-社会予測の一つの試み(上・下)』ダイヤモンド社。

D・H=メドウズ、D・L=メドウズ、J=ラーンダズ、W・W=ベアランズ三世 (大来佐武郎監訳) (1972) : 『ローマクラブ「人類の危機」レポート 成長の限界』ダイヤモンド社。

ブライアン=フェイガン (東郷えりか訳) (2008) : 『古代文明と気候大変動-人類の運命を変えた二万年史-』河出書房新社。

水野和夫 (2014) : 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社。

山内一宏 (2020) : 随想『成長の限界』再考-資本主義の後に来るもの-、『立法と調査』425 : 79-96。